

ラ・フォンテーヌ『寓話集』の フランスにおける受容

森 井 正 史

前書き

ラ・フォンテーヌは、中世イタリアの作家ボッカチオの『デカメロン』（『十日物語』）をまねた、いささか猥雑な『小話詩』*Contes*を書いたがために、とがめられることもあった。彼自身、晩年に自分の作品が道徳的によくないものであることを後悔している。が、彼の『寓話集』は、いくつかの誤解や批判を別にすれば、発表後、評判は高まり、栄光の道を辿ったと言えるであろう。ポール・ヴァレリーが述べているように、ラ・フォンテーヌはフランスの詩人の中で最も多く利用されてきた詩人であり、フランスの国民なら誰でもその詩句を何行かは暗記しているくらいポピュラーなものとなっている。^(注1) 周知のことであろうが、『寓話集』は現在も相変わらず教育に取り入れられ、フランスの国民に子供の頃から親しまれているのである。が、批判も無くはなかった。

本論においては、『寓話集』が、発表後、フランスで今日までどのように受け止められてきたか、その受容の概略を、主として研究者マルレーヌ・ルブランの指摘^(注2)に従って見てみることにしたい。

ラ・フォンテーヌ（1621-1696）と同時代の人々は、彼の寓話をどのように受け取ったのであろうか。『寓話集』は、第1集が刊行されるやたちまち成功をおさめたが、この寓話集に対する評価は様々である。同時代の読者がラ・フォンテーヌに期待していたものは、彼らを楽しませ彼らの気に入るもの、即ち小話（コント）と寓話であった。セヴィニエ夫人は、彼が小話の作者としての

才能を、人の意表をついて面食らわせるような文筆活動に浪費している、と非難している。セヴィニエ夫人がこのように非難していることに対して、ルブランは、ラ・フォンテーヌは寓話のジャンルに閉じこもることを拒否しているのである、と擁護している。確かに、ラ・フォンテーヌの書いた小話はモラルの点でとがめられても仕方がないという面はあるが、彼は小話を韻文で書くことによって、寓話を韻文で表現する技量を磨いた、ということができであろう。実際、彼は、寓話*la fable*と小話*le conte*という2つのジャンルにまたがる詩人であったのであるが、この詩人は、マクロ的に見れば、今日まで、小話の作家*le conteur*としてではなく、好んで寓話作家*le fabuliste*として高く評価されてきたのである。^(注3)

ジャン-ノエル・パスカルJean-Noël Pascalは、彼の18世紀の寓話選集『啓蒙の世紀の寓話』*La fable au siècle des lumières*の序文で、18世紀が寓話の黄金時代であることを呼び起こしている。ラ・フォンテーヌの『寓話集』はどうかと言え、作者の生前に、出版上、大成功をおさめ、1700年から1800年の間に出版された回数は100回を下らない。^(注4) 当時、教育者たちが比較的近い過去に書かれた文学作品を使用するのをためらったにもかかわらず、彼の寓話は学校で使用されることを認められたのである。そして、ラ・フォンテーヌの寓話は、以前から学ばれていたイソップ寓話やファエドロスの寓話に取って代わることになるのである。

ところで、1688年の『寓話集』第1集の序文で、ラ・フォンテーヌは、彼のライバルが現れるであろうことを予測している：「私の作品は、他の人々に、ことをもっと進めようという気持ちを生じさせるであろう。」^(注5) 実際、彼の同時代の人々（ヴィルディユー夫人、フルチエール、ペロー、バンセラード、etc.）が寓話を書き始めている。また、ルイ14世の亡くなる1715年からナポレオンの失脚まで、50人を下らない作家がフランス語の寓話集を世に出している。^(注6) 18世紀には、ヴォルテールからブフレールまで、寓話に熱をあげなかった文人はまれである。彼らがライバルとしてラ・フォンテーヌと競おうとしたにせよ、また、まれには激しく彼を批判したにせよ、皆、ラ・フォンテーヌにながし

かを負っていることを認めている。18世紀の文人たちは、ルソーのような数少ない例外を除けば、ラ・フォンテーヌに対する称賛という点では意見が一致していたのである。

18世紀後半には、一般的にはラ・フォンテーヌは啓蒙主義の先がけだと思なされた。1774年、マルセイユのアカデミーがこの寓話作家への賛辞をテーマにして論文を応募したことが、その輝かしい証拠である。そして、シャンフォールが賞を獲得している。彼は、ラ・フォンテーヌが人生の諸事を考察する偉大な思想家であり、さらには、自分の芸術的技法l'artを内に秘めるという最高の技法の持ち主であると思なしている。^(注7) ラ・フォンテーヌは、17世紀の彼の同時代人にとっては寓話作家であり、18世紀にはとりわけ詩人として受け入れられたようである。ラ・フォンテーヌは詩の真髓を体現している、とシャンフォールは称賛している。また、ラ・アルプLa Harpeにとっては、ラ・フォンテーヌは子供や民衆の詩人であると同時に、フィロゾフphilosophes（哲学者）にとっても詩人なのである。^(注8)

ラ・フォンテーヌに対する詩人としての称賛は、19世紀まで続く。哲学者で批評家のイポリート・テーヌは、ゴーロワ精神の旺盛な詩人という周知のイメージを打ち立てる。ラ・フォンテーヌは、「驚くべき偶然によって、本能はゴーロワ的だがラテン文化と最も洗練された社会との交流で磨かれ、最も国民的で最も完成され最も独創的な詩作品を（フランス人に）与えた」（括弧内：筆者）のである。^(注9) また、テーヌは、ラ・フォンテーヌが「単に人間の生活の禁じられた部分を描いているのではなく、人間の生活の全般」を描いているが故に、「彼の寓話は、我が国の叙事詩である」と述べている。テーヌは『寓話集』が単に人々に楽しく読めてなおかつモラルを示すというだけに止まっていない点を指摘し、称賛しているのである。^(注10)

19世紀には、文芸批評に科学的方法を取り入れ、実証主義的な方法で解釈しようという傾向が強くなる。テーヌはその一人であり、彼は、文学作品を決定付ける要素として人種la race・環境le milieu・時代le momentの3つの要素と

個人的資質を挙げている。そして、ラ・フォンテーヌがゴーロワ精神（フランス人）を具現していて、シャンパーニュ地方（環境）の人間であり、ルイ14世の治世下（時代）に生き、これらの要素が彼の個人的資質である詩的想像力に働きかけ、彼の作品を決定付けている、としているのである。

作家で批評家のサント=ボーヴは、テーヌとは異なり批評体系こそ持っていないが、『寓話集』の巻頭を飾る『蝉と蟻』について、一定の方法で解釈している。つまり、「『蝉と蟻』の美しい話は、南方人と北方人の話である」《*La jolie fable de la cigale et la fourmi est l'histoire de l'homme du midi et l'homme du nord*》と解釈している。^(注11) 蝉は南方人を象徴しており、蟻は北方人を象徴しているから見なしているのである。シャルル-ヴィクトワール・ド・ボンステタン氏の考えを敷衍して、サント・ボーヴは、さらに述べている：「北方では夜が長く冬も長く、南方ではその反対で夜が短く冬も短い。それ故、例えば北方人は必然的にねぐらを造り、内的生活をし、家族関係を持つ。一方、南方人には至る所に太陽と木と果物がある。前者は、仕事をして食料を買わねばならず、懸命に仕事に精を出す。冬が来ることを予見して将来を心配する。」「南方では、人はその日暮らしをし、太陽が常に照り、仕事は簡単で中断されることもなく、感覚は常に活発であり、遠い先のことを望んだり心配したりはしない。人はそこでは、想像力の飛躍に好都合な精神の自由をまさしく享受する。そこにこそ、あの愛すべき詩人が生まれねばならず、またそこにこそ生まれ得るのである。詩人は何もしない（イタリックは原文 *rien faire* に倣う）ことの甘美さと現在の喜びと明日の忘却を謳歌していたのである。」^(注12) 気候が人間に及ぼす影響は、既に遠くヒポクラテスが考えていた問題であり、フランスではモンテスキュー（*De l'Esprit des lois*, 1748）が既に18世紀の中頃に流行させている。1825年に、スタンダールもサント=ボーヴと同様の指摘をしている。^(注13)

ラ・フォンテーヌに対する称賛の増加は、やがて減少へと向かう。彼の文学的運命は1848年の2月革命を分岐点としてが急激に変化するのである。ピエール・ルルーPierre Lerouxは、ラ・フォンテーヌの真の寓話作家としての資格

に異議を唱えている。彼は、ラ・フォンテーヌが道徳的意味を犠牲にして物語の娯楽性を求め、寓話を叙事詩やドラマにむやみに近づけていると批判しているのである。が、一方で、彼は、ラ・フォンテーヌの創意工夫のあらゆる功績を認めてもいる。^(注14)

ラ・フォンテーヌは、ルブランによると、第3共和政（1870-1940）の時代から1960年頃まで、偉大な文学の中で民衆に最も人気のある作家であると思なされてきた。周知のように、ラ・フォンテーヌはフランスの学校で最も頻りに学ばれてきた詩人である。もともとルイ14世の息子（王太子）に捧げられた文集（『寓話集』第1集）が、どのようにして歴史の一定の時期に労働階級のモラルの書となり得たのか。学制のヒエラルキー（大学から小学校まで）が上になればなるほど、彼の評価が下がっていることから、彼は労働階級の詩人であるとも言えるのであろう。^(注15) 時代は遡るが、第三共和政のもとで、ラ・フォンテーヌの『寓話集』は当のフランス人たちからモラルの書だと思なされていたという。国民全体がとりわけゴロワ精神に満ちた詩人の話 *les récits* の中に自分たちを認識するよう誘われていたのである。ルブランによると、当時、特に10篇の寓話がよく知られ、好まれた。それは、『蟬と蟻』 *La Cigale et la Fourmi* (I, 1)、『烏と狐』 *Le Corbeau et le Renard* (I, 2)、『牛と同じくらい大きくなりたがる蛙』 *Le Grenouille qui se veut faire aussi grosse que le Bœuf* (I, 3)、『都会の鼠と田舎の鼠』 *Le Rat de ville et le Rat des champs* (I, 9)、『狼と犬』 *Le Loup et le Chien* (I, 5)、『鳩と蟻』 *La Colombe et la Fourmi* (II, 12)、『屋根裏部屋に入った鼯（いたち）』 *La Belette entrée dans un grenier* (III, 17)、『小さな魚と漁師』 *Le Petit Poisson et le Pêcheur* (V, 3)、『兎と亀』 *Le Lièvre et la Tortue* (VI, 10)、『農夫とその子供たち』 *Le Laboureur et ses enfants* (V, 9) である。^(注16)

これらの寓話は、人が従うべき真のモデルであると思なされていたのである。これらの寓話から生じているメッセージは、「働き、骨を折りなさい」というように要約できるとルブランは指摘している。長い間、優勢であったこのよう

な一義的な解釈は、どのようにして可能であったのか。このような疑問に対して、ルブランは、これらの寓話が王太子にも共和国の下層階級にもモデルとして役立つには、これらの寓話に途方もない多義性une polysémieがなければならない、とラ・フォンテーヌの寓話の持つ多義性と開放性を指摘しているだけである。^(注17) ルブランが指摘するように、ラ・フォンテーヌの寓話が内包する様々な教訓の中で勤労の重要性が重視されていたとすれば、それは当時の社会的・経済的情勢と何らかの関係があるのかどうか。このことについて、ルブランは何も触れていない。

19世紀前半から後半にかけてフランスでは、産業革命が進行していたが、その過程はイギリスなどと較べて、きわめて緩慢であり、プロテスタンティズムが勤労の精神と結びつき産業革命を推し進めたというような図式も、フランスには余り当てはまらない。が、第三共和政時代に入った頃に、一通り産業革命が完了していて、この時代が17世紀・18世紀と較べれば生産活動が飛躍的に盛んになっていた時代であるということを考えれば、ラ・フォンテーヌの寓話が、時代の影響を受けて勤労精神と結び付けられる傾向が強かったということは、あながち否定できないであろう。

20世紀の前半に、ラ・フォンテーヌは、超現実主義者の中でイデオロギー的な観点から手厳しく批判されている。アンドレ・ブルトンは、1933年に、ラ・フォンテーヌの寓話をばかげた話であると誹謗している。『ヌーヴェル・リテレール』*les Nouvelles littéraires* (文芸批評誌)で、ブルトンは、「偽詩人ラ・フォンテーヌは、世間ではとりわけ非-詩的な美点である、あの悪名高き良識 bon sensを嘆かわしいくらいに強化している」と言っているのである。^(注18)

第1次世界大戦後、ブルジョワ社会が行き詰まり、旧態然とした価値観や既成秩序に異を唱える作家や詩人にとって、ラ・フォンテーヌは既成のモラルを説く偽詩人と映ったのである。

詩人ポール・エリュアールは、この寓話作家を「悪者、モラルなき人間、子供をだめにする者」と見なしている。エリュアールは、彼が選んだ過去

の詩の選集の中にラ・フォンテーヌの寓話を入れるのを認めないと決心している：「人類の希望の岸辺から彼を遠ざけよう。」ラ・フォンテーヌは、一般的に受け入れられているのとは反対のイメージで捉えられてしまうのである。^(注19)しかしながら、この種の批判は一部の作家や詩人に限られるのであり、当時(20世紀中葉)にそのような非難が一般的であったのではない。

1960年頃以降は、特に批評家たちの間では、ラ・フォンテーヌの人気は根本的に変わる。つまり彼は単なる庶民階級の特権的な作家では、もはやなくなるのである。こうした変化は、読み方の変化、つまり、一義的monosémiqueで教育的見地からの読み方から、多義的polysémiqueで開かれた読み方への変化を反映しているといえよう。それまではラ・フォンテーヌの『寓話集』は単に子供向けの教育的な寓話であると、一様に受け取られてきたが、(そして一部では今でもそうだが) そうした読み方に変化が生じたのである。この寓話集が必ずしも一義的で教育的なものではないことが、次第に明らかにされるようになったのである。特にジュネット流のテキスト研究、即ち‘詩学’ la poétique の概念を取り入れ、超テキスト性la hypertextualité、相互テキスト性l’inter-textualité、メタテキスト性la métatextualitéといった観点から、ラ・フォンテーヌの寓話とその書き換え(パロディや模作)などの一連のテキストが分析されるようになっていく。^(注20)

結び

以上、『寓話集』の受容について概観してきたが、以上で触れたことの他にも、批判している例としては、フェアブルのように、博物学の立場から、『寓話集』に描かれた昆虫の有り様と現実の昆虫の生態とが異なっている点を指摘し、子供たちが誤って信じ込む恐れがあると警告しているケースもある。^(注21)こうして見ると、『寓話集』に対する批判がいくつかあることは確かだが、動物寓話そのものがもつ親近性に加えて、その快いリズムや諧調、変化に富むイ

メージ、登場者たちの会話のやり取りの妙、人生に対する洞察の深さなどを自国語（フランス語）の韻文で表現し得たことから、ラ・フォンテーヌは国民的詩人の一人として今日も親しまれているのである。本論では逐一取り上げはしなかったが、彼の寓話のパロディが現代まで数多く書かれていることから、彼の寓話がどの時代にも広く国民に浸透していることを物語っている。いわゆるイソップ寓話は、フランスではラ・フォンテーヌの寓話として知られているのである。

注

(注1) Paul Valéry, *La poésie de La fontaine*, La Table ronde 1, Librairie Plon, Paris, 1948.

(注2) Marlène Lebrun, *Regards actuels sur les Fables de La Fontaine*, Presses Universitaires de Septentrion, Villeneuve d'Ascq, 2000.

(注3) Ibid., p.84.

(注4) Ibid., p.85.

(注5) La Fontaine : Œuvres complètes I (Bibliothèque de la Pléiade), 1991, p.6.

(注6) Marlène Lebrun, p.85.

(注7) Chamfort, *Éloge de La Fontaine*, in La Fontaine : Œuvres complètes I (Bibliothèque de la Pléiade), 1991, pp.953-974.

(注8) La Harpe, *Seconde Éloge de La Fontaine*, in La Fontaine : Œuvres complètes I (Bibliothèque de la Pléiade), 1991, pp.975-995.

(注9) Marlène Lebrun, p.86.

(注10) Hippolyte Taine, *La Fontaine et ses Fables*, 27^e édition, Hachette, Paris, 1929, p.45.

(注11) Sainte-Beuve, *l'Homme du midi et l'homme du nord de Charles Bonstetten*, Premiers Lundis, tome I, article du 15 mars 1825, in Sainte-Beuve: Œuvres I (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, Paris, 1969,

p.93.

(注12) Id.

(注13) Stendhal, *Courrier anglais*, tome II, article du 1^{er} Juin 1825. Le Divan, Paris, 1935, Kraus Reprint, Nendeln/Liechtenstein, 1968, pp.282-286.

(注14) Marlène Lebrun, p.83.

(注15) Id.

(注16) Marlène Lebrun, p.84.

(注17) Ibid., p.83.

(注18) Ibid., p.86.

(注19) Id.

(注20) Marlène Lebrun, p.88.

(注21) Jean-Henri Fabre, *Souvenirs entomologiques*, Robert Laffont, Paris, 1989.

参考文献

- ・ Émile Faguet, *LA FONTAINE*, treizième édition, Société Française d'Imprimerie et de Librairie, Paris, 1913.
- ・ Hippolyte Taine, *La Fontaine et ses Fables*, 27^e édition, Hachette, Paris, 1929.
- ・ Eugène Marsan, *INSTANCES*, Édition Prométhée, Paris, 1930.
- ・ Stendhal, *Courrier anglais*, tome II, article du 1^{er} Juin 1825, Le Divan, Paris, 1935, Kraus Reprint, Nendeln/Liechtenstein, 1968.
- ・ Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou de l'Éducation*, in Jean-Jacques Rousseau : Œuvres complètes IV, ÉMILE, ÉDUCATION-MORALE-BOTANIQUE (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, Paris, 1969.
- ・ Sainte-Beuve : Œuvres I (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, Paris, 1969.

- ・ Jean-Henri Fabre, *Souvenirs entomologiques : Étude sur l'Instinct et les Mœurs des Insectes*, édition établie par Yves Delange, t.1, V^e série, chapitre XIII : *La Fable de la Cigale et la Fourmi*, Librairie Delagrave, Paris, 1922の復刻版. Rinsen Book Co., Kyoto, 1990.
- ・ La Fontaine : Œuvres complètes I, FABLES, CONTES ET NOUVELLES (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, Paris, 1991.
- ・ Marlène Lebrun, *Regards actuels sur les Fables de La Fontaine*, Presses Universitaires du Septentrion, Villeneuve d'Ascq (Nord), 2000.
- ・ 『フランス史』(新版) 井上幸治編、山川出版社、1986年